斬なさるゝ貴下ではござりますまいと失禮ながら存じまする。殊に忰は幼なきより孔孟の道を學び大義明分は辨へて居ります苟にも朝廷に對して不忠不義を働くやうな躾は此母が致さぬ筈サア斯程に申し解きましても御疑念が晴れず尙忰をば手に掛けやうとならば何とも致し方がござりませぬ不運とあきらめてお留は申しませぬが老先短い老母一人生存へるも詮ない事母子共々潔くお手に掛て果まするでござりませう」と實に理義明白に說かれて見れば成程一々尤である殊に我子を庇ひて身を投げ出した老母の眞情と其雄々しさには心密かに感じた。もう手の下しやうも無い然し刀の手前只引歸る譯にも行かぬ「いかにも其方の云ふ所は一應は聞えた然らば今日は此儘引取るが若し外を調べて其事實があつたとすれば重ねて首を申受にまゐるぞ先づそれ迄は其首は確と預てまゐるぞ」と棄臺詞を殘して引取つた。踏込で斬れば譯もなく殺せたのである中村は實に命冥加の人でそれにしても其母は豪い女傑である。

雜錄

●朝鮮の家庭

▲門が幾箇もある　近所に朝鮮の貴族があつてその貴族の夫人が日本婦人が珍らしいから一度逢ひたい來て下されとやかましく云つて來る、下女に韓語を使ふものがあつたのでそのお邸へ行つたことがある、行つて見ると門が幾箇もあるのには驚いた、大門を入ると下男下女の部屋が門內に並んでゐる、一度下女なり下男になつたら終世浮ぶことはないそれだから總體下男下女夫婦で暮らしてゐる、そこを過ぎると又門がある、この門を入ると家來衆の部屋があつて又門である、この門を入ると正面に應接間がある、その邸の中央の華美な裝飾の室に主人が頑張つてゐる、この主人の室の四方は廣い板の間でこゝにまたゴロ〳〵門に座がある。こんな有樣だから夫人の居間へ行くにはもうヘナ〳〵になる、夫人の居間はこの邸內にある

けれど又別に一廓をなしてゐた

▲貴婦人お化粧　貴族の夫人としては餘りにその居間が狹い、四疊半位であつた、夫人はよく來て呉れたといつて大層悅んだ、銘仙の衣服を撫でたりして美しい衣服であると賞め帶も賞めたが斯う大きく結んでは脊中が辛度いことはないかと心配さうに問うた、この夫人は非常な美人で年齡は二十五六、化粧品を出して見せたりしてこんなものは日本でつかふかと問ふ、その白粉は日本でズッと以前に使つた細小い塊(切餅のやうな)のものである、又鬢附をコテ〳〵とつける習慣がある、それがため夫人の髮はそれは〳〵漆のやうに美しかつた、白粉を濃く塗るから更に美しさを增す、そして眉毛なども三日月形でスーと引いてあるさへ美しいのに額の生え際を一種の輪廓をつけて綺麗に剃つてある、それは絹絲の片端を口にかみ片端を手に持ちて額に摺り、根に任せてウブ毛を切るのである

▲子供の誕生　子供が生れると男は勿論女でも他人は滅多に產室に入れない別に產婆といふ者がないところだからそこに雇はれてゐる下女が何も彼もやつて退ける、どんな暑い時でもオギャーと生れたら直に足袋を穿かせるのだ、初めての誕生日の時行つて見た、主人の居間は男達ばかりで賑つゐる、細君の居間は婦人客ばかりで騷がしい、嬰兒は子供だけの白い極薄い蒲團を敷いて寢させてあつた、總體襦袢を着ない習慣で嬰兒までも襦袢を着せぬ、玉がいろ〳〵と綺麗につけてある紅や紫の色美しい帽子が眠つてゐる嬰兒の頭に被らせてあつたこの帽子は必ず誕生日には被らす習慣である、子供の傍へ行つて美しいお子やと皆賞てゐる、そのうち御馳走が出る、斯ういふ時には料理人が來て獻立をする、落雁のやうな菓子が料理に添へてあつためでたい料理にはこの落雁のお菓子が必ず添うてゐる、婦人が子供を背負ふのは日本のやうに脊中の眞中へ括りつけるやうにしない、腰のあたりへ白い小蒲團をやつて落ちないやうにくゝつて平氣に歩いてゐる、外出する時はお極りの被り帽子を被るとその帽子がフワリと垂れて子供の身體を包んで了ふ

▲玩具は無い　子供の玩具は殆ど無いというても然りで偶に日本の首振人形など持つて行つて子供に與へるとワアと泣く位である、凧遊びと氷滑りとシイソーはよくやつてゐる、シイソーといつても材木をどこからか持つて來てガタリガタリとやるのである

▲婚禮の披露　判尹とかいふ何んでも日本の裁判所の判事とかに當る人の息子がお嫁を貰ふたその披露に請待されて行つた、お嫁を貰ふ事となりいよ〳〵祝言をやるといふ日の朝早くからお聟さんは薄化粧して彩色の服を着て美しく飾つた馬に乘り供を伴れて嫁さんを迎へに行く、歸りには嫁さんの家で捧げた鳩とか鶯鳥とかを持つて悠々として歸る、

お嫁さんは輿に乘つて數多の附添に擁せられて聟さんの家に入る、お嫁さんは一旦化粧の室へ入つて、化粧を仕直す、お晝に祝言の式が濟んで三時頃から披露宴に移つた、嫁さんは前へいろ〳〵の玉を幾つも〳〵ダラリと下げてゐて鳥の羽の附いた被りものを着てゐた、頭髪は三つ組にして濃い化粧美しいのに頬の上へほッと日の出のやうに紅で丸を出してある一座席定まると豚の肉や鳥の肉迄もゴタ〳〵と煮た喰物をお喰り下さいと主人は勸めるので啜つて見たら大層旨かつたそしてその聟さんが十三で嫁さんが二十五であつた、總體朝鮮の婚禮は聟さんの方が年下であるが妙に感じられる（大阪朝日）

●養育院收容者

理想なる將來　の黄金時代は知らず事實自から養ふ力も無くさりとて扶助して呉れる近親もないと云ふ如な行路病者孤獨の老幼又は浮浪者は昔から尠からずあつたと見えて大岡越前守は今より二百年前養生所なる者を設け、下つて松平定信も敎育所なるものを立てゝ不幸なるもの共を救護した此東京養育院も明治五年道途に浮浪せる乞食百四十餘名を集めて救養したのが濫觴で爾來場所や内容や種々に變動して今日に來つたものである而して現院長澁澤榮一氏は明治十七年から引續いてやつて來たのである

▲收容さるゝ人々　本院は小石川大塚辻町で其内兒童全部は巣鴨の分院に收容し其童中性質の不良なるものは井の頭の感化部に入れ體質の薄弱なものは安房の船形町の分院で療養せしめてある、で一體什麼者が此院に收容されるかと云ふと窮民と云ふのは二ヶ年以上市内に原籍又は寄留籍を置くもので老衰、病氣其他の理由で自活することの出來ぬもの、次は行路病人と云つて行き倒れ第三には棄兒で其次は遺兒と云つて親や原籍は分つて居ても置き去つたものゝ行方の知れぬもの又迷兒も收容するが此二者は引取人のない時は結局棄兒に編入されて新たに一家を創立する事になるのである以上の五種と感化生を併せて六種のものを收容し救養するのである

▲望み無き生活　收容されても扶養者の發見されたる場合には直ちに其者に引渡す又一時飢餓の爲めに救はれたるものは軀が出來れば自から出て行くので出入は隨分頻繁であるが是を平均すると此の頃では一千七百餘名を收容して居る是等の多數の者も太抵は病者や老衰者で即ち多くは病人としての生活を送つて居るので此中の健康狀態に復した男百名、女子四十名許りが僅かに狀袋貼り紙函、麻裏、印刷、洗濯及仕立、機業、炭團などの製造に從つて居る、夫れで一人の稼ぎ高は大人の最高額が一ヶ月四圓六十三錢最低は僅か六錢（七月中の調べ）位いで是は規定に依て全部本人に拂ひ渡される此中炭團製造は重に白痴や聾啞者が遣つて居るが材料は砲兵工廠から買つて來て隨分大仕掛けにして居る食事の如きは贅澤にしては經費の點もあり又本人將來自活の際邪魔になると云ふので飯は米七分麥三分（と云ふのは規則で記者の見た所では反對に麥七米三位と思つた）のを朝は粥にして胡麻鹽又は漬物を副食に晝は同割合の飯に一汁、夕食は飯に煮〆又は肉入の野菜と云ふ實に憐れな者であるが是で經費は一ヶ月九千圓から一萬圓も費ると云ふことである

▲零落の原因　彼等が此院に收容さるゝに至つた徑路を調べると孰れは病氣の爲め老衰の爲め幼弱な爲め自から活きて行く事が出來ないので前陳の如く六種の中の一つとして收容さるゝのであるが

其直接の原因は姑く措き零落の其遠因に就て調べると自から招いたものとしては左の如く（計千二百の中）

飲酒の爲め	男	四〇	女	一	
色情の結果	同	二一	同	不明	
賭博の結果	同	四七	同	一	
怠惰の爲め	同	四五	同	九	
涙　費	同	二七	同	二九	
意思薄弱	同	二〇	同	九	
職業に倦み易き	同	三一	同	一	
虚榮の爲め	同	一二	同	一七	
浮涙の生活を好む	同	六四	同	三三	

等で已を得ざる原因としては病氣が大多數である又收容當時に診斷した病氣の種類は

肺結核	男	一七六	女	三三	脚氣	男	八四	女三〇
腦病	同	四〇	同	八	神經系	同	一〇一	同三七
胃疾	同	四七	同	一〇	傳染性	同	一一〇	同二七

等が重なるもので教育程度は殆ど無と云つてよいのが半數で中學以上の學力あるものは二名位である其他瀕死の行路病者が多いので死亡は毎日二三人宛ある

▲都會は極樂に非ず　又行路病者が最初出京の目的又は理由としては

糊口の途を求めて	男	二五七	女	一五七	
奉公するとて	同	八一	同	一二〇	
學事又は職業研究に	同	四二	同	四	

等が重なるもので一千六百人の中東京在住者は四百五十名計り其他は皆地方からのものである是等は近年農村の疲弊も其原因であるが例の都會を極樂淨土と思惟させる諸種の出版物や成功熱に罹らせる煽動的雜誌と自己の虚榮心の爲めなどが大部分を占めて居るのは注意すべき問題で其證據には出京して此院の厄介になるものは老者に尠くて血氣盛りの廿歳前後から卅四五歳迄が過半數であると云ふに至つては實に案外至極で如何に彼等が都會を買ひ被つて居るかゞ解る殊に妙齡の婦女子が都會に出て奉公しながら一廉の者にならうなどと思つて、漠然 出京した後手もなく誘惑の惡魔に地獄へ伴はれて了ふものが非常に多數であるのは新らしくは無いが隨分注意すべき問題では無からうか（中央）

●兒童虐待防止事業

神田區元柳原出獄人保護所長原胤昭氏は、昨年七月以來餘力を以て兒童虐待防止事業に從事し居りしが今親しく氏に面會して該事業の由來と約一年間の成績とを語るを聞くに

▲該事業の起原　今や兒童虐待防止事業は犯罪防遏の一手段として歐米諸國の著しく留意する處なり我國にても先年動物虐待防止會設置せられ此方面に於ては着々歩武を進めて成績佳良なるものあるも兒童に對する虐待防止事業に至つては或は未だ甚だしく其必要を感ぜざりしか從來何等の施設もなかりき

▲原氏の動機　然るに近年に至り文明の進歩と共に我國に於ても間々兒童虐待の事實を見聞するに至り新聞紙上に於ても比々として此種の報道を見るに及びては最早捨て置くべきに非ずと思ひ居る中昨年六月横濱に於て某興行師の使用少年が虎に嚙まれて大怪我を爲したる由を聞き探究の結果全く該興行師の虐待に起因することを確むると共に繼子或は貰ひ子にて虐待さるゝもの、白痴の兒童を人並の者と誤解し世間並にコキ使ひつゝあるもの又は折檻の結果不具癈疾に垂んとしつゝあるもの等却々に尠少ならざるを探知し最早一刻も猶豫ならずと偖は早速その救濟に着手したる次第なり

▲原氏の方法と成績　其方法としては先づ近隣に虐待されつゝある兒童の在るを知る人は郵便にてなり口頭になり匿名にても又郵税先拂にても宜しければ其旨小生迄通知し呉れべき由を印刷したる紙片を配附したるに其後續々として申越しあり十中八九は金を附けて私生兒を貰ひ受けたるを虐待するものにて其都度當方より人を派して其實狀を取調べ愈確實なる時は予自身出張して其不心得を諭し將來甚だ恐るべき結果を來すべき由を說けば多は納得して其虐待を止むるを例とすれど到底改悛の見込なき者は警察の手に依賴して親元に返さしめ居れり、昨年着手以來約一年間の成績は總數三十二人(男兒十四人、女兒十八人)にて中岡山孤兒院、安房養育院分院等完全なる孤兒院に依托したる者四名、安全に加害者の手より離れたるもの三名、歸國せしめたる者三名、監視中加害者の所

在不明となりしもの二名、說諭後現に警戒しつゝある者十九名、死亡一名なり（朝日）

●阪本龍馬の姉

目下高知育兒會に保姆を勤むる岡上菊惠子（四十四）といふあり是れぞ海南の偉人阪本龍馬の姉乙女史の長女にして父を壽庵（後新助と改む）と呼び高知市本町（今の本町筋）に住し醫を業とせしなり菊惠子には兄社太郎氏ありしも夭折して今亡し而して乙女女史は天資頗る豪放にして乘馬、擊劍、柔術、長刀等の武術に長じたる點に於て殆ど男性的資質の有し常に龍馬を指導して後年の名を成さしめたるは夙に人の知る處なるが今菊惠子の物語る所を聞くに

▲惡漢を縛り上げる　女史は平生女々敷き事を嫌ひ專ら精神修養を第一と爲し居たるが年若き頃或夜獨り築屋敷を通りしに何者とも知れず暗に乘じて茶畑の木蔭より顯はれ出で矢庭に女史を捕へて怪しかる擧動に及ばんとせしを女ながらも日頃武術に鍛へたる腕前何條是敷の事に驚くべき大喝一聲曲者の利腕捕へて其場に捻ぢ伏せ腰なる細紐解くより早く有無を云はせず男を縛り自分の脊に括つけて連れ歸り『母樣こんなもの捕つて來ましたから卸して下さい』と云ひつゝ自ら其繩を解きて其座に据ゑつけたれば流石の曲者も仰天して平謝りに謝まりたりといふ

▲天狗の鼻を挫く　龍馬が潮江天滿宮にて天狗の鼻を捻上げたる逸話は有名なる話なるがこは女史の逸話を誤り傳へたるのなり其頃天滿宮へ每夜天狗現はれ出づるとの風說頗る高く之に鰹節を供へて立願すれば何事も叶ふべしとの事に女史深く之を怪しみ一夜社內に潛伏して待つとも知らで例の天狗のノコ〳〵と顯はれ來りしかば己れ曲物正體を發き吳れんと力任せに取つて投げ付けたれば流石の天狗も高き鼻も忽ち挫かれ假面を脫きて正體を現はしソコ〳〵逃げ去れりといふ

▲其子の敎育　又女史は平生女にも膽力の必要なることを持論と爲し居りしが少女菊惠子が恰もスヤ〳〵と眠り居る寢所へ忍び入りて鬼の面を被り或は顏に墨や朱を塗りて突然菊惠子を搖起し若し目を覺して驚きの餘り泣き出すやうの事あれば忽ち叱り飛ばし之に反して平氣なれば非常に賞めそやすを常とせし程にて苟且の遊戲にも女らしき遊

びは大の禁物と爲し居たりと斯かる教育の下に成長したる社太郎氏の如き幼より膽力人に勝れ嘗つて十一歳の頃叔父龍馬が社太郎の佩ける刀を見て『そんな刀は役に立たぬ』と云ふや否や其刀を取つて忽ち庭前の石に打ちつけたりしかば龍馬も感心して自分の帶べる脇差を社太郎に與へたりと此兩刀今も猶菊惠子の家に秘藏し居るが鞘は梨地に雲龍を畫ける二尺計りの立派なものなりと

▲繪畫にも堪能　女史又繪畫の嗜み深く社太郎の歿後菊惠子が非常に其死を傷みて『私はいつ兄さんの所へ行けるのです』など、社太郎を慕ふ情切なるより女史は直に筆を採り社太郎に酷似せる肖像を描きて與へしかば菊惠子は悅んで其畫を佛壇に貼りさア飯をお上り何をお上りと無心に突衝付けしかば紙破れて肖像は迷茶苦茶となる毎に女史は其都度々々書き改め遣り尙家庭の有樣など描き與へて慰めしかば菊惠子は知らず識らずの間に大に家庭の趣味を會得されたりと云ふ(日々)

●胎內敎育

數多の動物中　恐らく人間程幼年期の長いものはありますまい、鳥類は卵から孵化すると、直に自分で餌を索める、哺乳類でも生後一二ヶ月か、それとも五六月位を經過しますと、親に離れ、自分で生活を營みますが、人間は中々さうは參りません、何うしても生れて一年位は步行すら出來無い許りか十二歳になる迄は國民教育を受く可き時期でありますから何の仕事も出來ません、而もそれから進んで高等教育を受けやうとする者になると二十四五歳迄は親の保護を受けなければなりません、斯樣に人間に限つて、幼年期の長いのは、人間に必要缺く可からざる教育を享けねばならぬ必要からで、即ち他の動物に卓越して大に發達する所以であります、斯の期間は人間の一生涯中、最とも樞要な時代に相違なく、物に譬へて申すと草木の發芽時代とでも稱す可く、決して等閑視してはならぬ時代と思ひます、ですから子を持つ親達は、深き注意を要するは勿論の事です

▲胎內教育　子女の教育は何時頃から始まるかと申しますと、勿論母胎に宿つた時からだと思ひま

す、それ故に人の母たるものは、此時から充分の注意を拂ふは元より、努めて心に邪念を懷かず、能く氣を養ひ食物にも留意し、運動も適度にして、何處までも身體の攝生を怠らず、專ら胎兒の敎育を計る可きであります

▲西南の役と徵兵　胎敎の必要な事は、今更ら云ふ迄もありませんが、之に付いて恰好の實例があります、それは去る明治三十年度の徵兵檢査に出た壯丁は、西南戰爭の頃、母胎に宿つた者計りで、其際戰地であつた肥筑の山野に棲まつてたものは少くとも耳を劈く大砲小砲の響や渦卷きかへる硝煙彈雨に、一日も安き日とては無かつたので三十年に限り、九州地方では、著るしく徵兵檢査の成績が劣等であつたと云ふことです此一事を以ても、胎內敎育が如何に產兒に及ぼすかは、實に尠少でないことが判るのです(時事)

●米國式珍談

▲數年前南亞米利加から北米の紐育に來た一人の男子がある其頃は未だ廿四五歲の男盛り鼻の下にも頤にも少しの髯さへなく女にしたらと言はるゝ程の美男子であつた名はマルチネと云つてトある商會の書記に住込み其れから種々の都合で會社や商店などの書記に屢々住換え三十歲になつた今年の先月まで勤めて來た而して其間には同じ商會に勤めて居る女書記から深く深く愛され度々結婚の何のと申込まれたがマルチネは逃げ廻つて相手にせぬ去ればと云つて微塵も其女を嫌ふ樣子は無く左も親しげに語り與じて居るので女の戀は益々募る思ひ餘つて再び切なる思ひを語ればマルチネは首を掉つて其事ばかりはと笑ひに紛らして仕舞ふ其內にマルチネは一人の女中を雇ふて自家に置いたので世間では結婚したのだと信ずる女書記は扨こそ自分に無情かつたのかと瞋恚の燄を燃やすなどの話も少く無かつた斯くて先月の或日の事マルチネは出勤しなかつたが其商會を訪ふた一婦人がある先づ其女書記に對して何某さん今日は……と名を呼んだが女書記は遂ぞ知らぬ婦人なので怪訝な顏をして居ると『私はレナ・スミス夫人です私を知りませんか』と云ふドウも失念しましたがと云

ふと夫人は噴飯して『昨日迄のマルチネです』女書記は愈々呆れてオヤ〳〵〳〵の百萬遍も唱へ段々仔細を聞けば夫人の話は斯うである『自分は南米に居る時何でも一つ奇拔な方法で金を儲けたいと思ひ立ち男の姿をしてボストンに行き舊知の醫者を訪うて話したら自分が婦人の身で男裝を爲し立派に男で通せたら一年で五千圓遣らうと其醫者が賭を勸めるから早速承諾して最早滿五年に達し二萬五千圓を取れる筈だから最う澤山だと愈々マルチネの服を脫棄て元のスミス夫人に復つたのですデスから貴孃の結婚のお話を承諾しなかつたのも已むを得ないでせう』と打笑ふ右の女書記は勿論許多の男女は皆アッと驚きの目を見張つてゐた而して夫人が五年間男裝し親しく男子の中に立交つて男子と云ふ者を研究した結果は『男子は女に比して筋骨の逞しいと云ふ一事の外少しも女に優る點は無い』と云ふ結論であるとは一層振つてる

（日本）